

國學院大學學術情報リポジトリ

Examination of the excavated bronze mirrors from Miyawaki site, Atami city, Shizuoka pref.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北澤, 宏明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001926

静岡県熱海市宮脇遺跡出土鏡の検討

北澤宏明

1 はじめに

静岡県熱海市の多賀神社境内に所在する宮脇遺跡は、古墳時代・古代における祭祀遺跡として知られており、昭和33(1958)年に熱海市史編纂に伴う発掘調査が行われた。神道考古学を提唱した大場磐雄氏が磐座・御神木・神奈備型の山といった原始信仰の条件が揃った好例として取り上げた重要遺跡でもある。

現在、宮脇遺跡出土遺物は熱海市教育委員会が所蔵しており、國學院大學博物館に寄託されている。筆者は、所管資料の整理業務として本資料を取り扱う機会を得た中で、従来素文鏡と考えられてきた小型青銅鏡が唐式鏡¹⁾であるとの椙山林継氏の認識(椙山1999)に裏付けを得ることができたため、今回同遺跡の出土鏡について報告する運びとなった。

小稿では、資料の報告を中心に、型式学的な位置付けを行い、宮脇遺跡の歴史的意義について考えていきたい。報告する出土鏡は、通し番号を付して記述を行った²⁾。

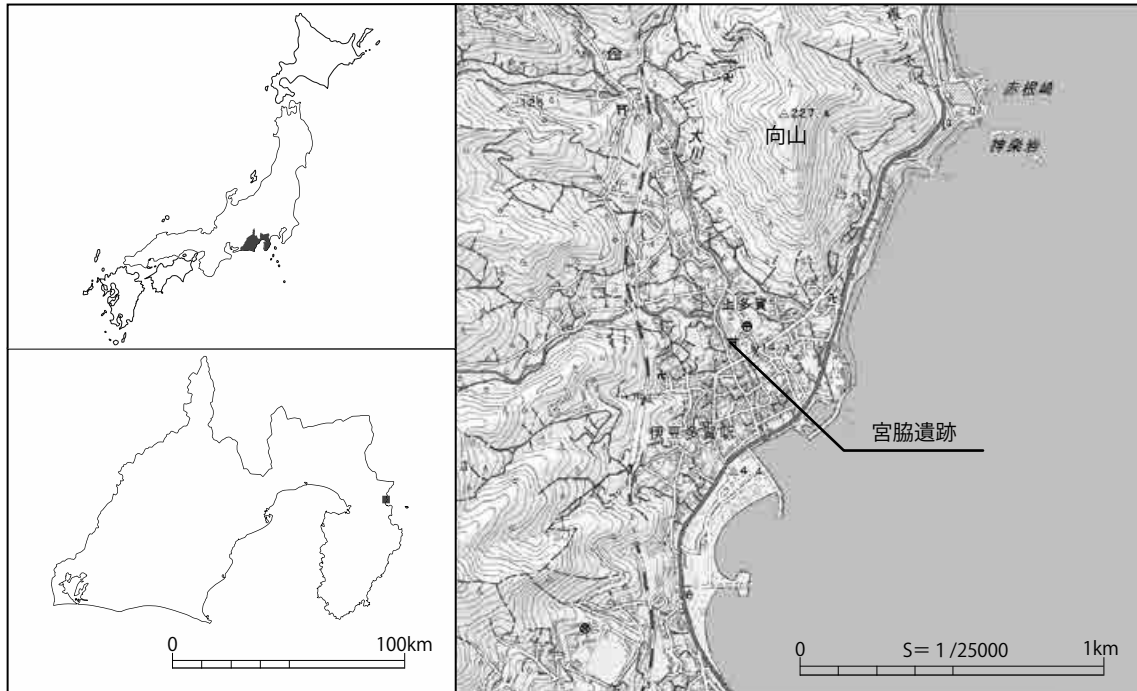
2 宮脇遺跡の概要

遺跡の立地 伊豆半島の東北部、静岡県熱海市上多賀字宮脇多賀神社境内に所在する宮脇遺跡〔第1図〕は、背後に丘陵がとりまき、相模湾に面する古い開折谷の裾近くに立地している。遺跡北側には神奈備型の向山(標高227.2m)が控え、南西側に、大川が流れる。かつては、北東側にも小河川が存在していた(小野1972)。

遺跡の概要 昭和33(1958年)に小野真一氏・大場磐雄氏等によって発掘調査が行われた。

調査区は、江戸時代に記録された境内図と、過去に石製模造品が収集された地点を参考として設定された。拝殿裏のA地区Aトレンチ1～4区と、御神木の周囲のB地区第1区・第4区に遺物の集中が見られ、その多くは、古墳時代～奈良・平安時代にあたる土師器の細片であった(小野1972)。遺物は、10cmほど堆積する表土層と、第2層にあたる礫石が混じる赤褐色の再堆積層を中心に検出された。古墳時代以降の遺物は、表土層から現代のガラスなどと混在した検出状況が見受けられる。再堆積層からは、縄文土器の出土がみとめられた。出土遺物は、縄文時代の磨製石斧・石皿・縄文土器、弥生土器、古墳時代～古代の青銅鏡・U字型鋤鉄先・不明鉄製品・土師器・須恵器、中世～近世の明鏡(洪武通宝)・和鏡(寛永通宝)灯明皿など、縄文時代～近世に至る幅広い遺物が検出された。

鏡の出土状況 A地区では、Aトレンチ2・3区を主体として、径約3mの範囲に大小の石群が確認された。その内、磐座と擬される石は、幅約92×69cm、高さ約48cmである。下部には玉石が敷かれ



第1図 宮脇遺跡の位置



第2図 鏡出土状況

ており、人工的に磐座を設置したものと判断されている。乳脚文鏡は、磐座の東北隅の下部から鏡面を下面に向けて数片に割れた状態で検出された。これに隣接して、小型唐式鏡2が鏡面を上にした状態で出土した[第2図]。その後、磐座を取り除いたところ、3区から小型海獣葡萄鏡が、4区から小型唐式鏡1が検出された。B地区では、第4区から葡萄文鏡と小型唐式鏡3、土師器甕片と銹着したU字型鋤鍬先片が出土した。

3 宮脇遺跡出土倭鏡・唐式鏡

宮脇遺跡では、古墳時代の倭鏡である乳脚文鏡1面と、唐式鏡にあたる小型海獣葡萄鏡1面・葡萄文鏡1面・小型唐式鏡3面、の青銅鏡計6面が出土した。これらの唐式鏡は、これまで古墳時代の素文鏡(大場 1967・1969)、素文儀鏡(大場 1970、小野 1972・1999)と位置付けられてきた。いくつかの論説(外岡 1978・今平 1990など)でも古墳時代中期の資料として捉えている。一方、相山林継氏は、唐式鏡の模倣と推測し(相山 1999)、小野本敦氏は、唐式鏡5面のうち3面は小型海獣葡萄鏡B類³⁾(杉山 2003)、その他の2面は素文鏡として位置付けている。(小野本 2013)。

以下、鏡式別に資料を報告する。

(1) 乳脚文鏡 [第3・4図、第6図-1、図版1・2-1]

従来、仿製漢式鏡(大場 1967)、変形六獣鏡(小野 1972)、変形神獣鏡(小野 1999)と報告されてきたが、主要な文様に基づいて鏡名を付ける通則に従うならば、乳脚文鏡の名称が相応しい。

遺存状況 大小合わせて計16破片からなり、調査時に一部を欠損(小野 1972・1999)したこともあったか、完全な復原までには至らなかった。全体的に文様が不鮮明な状態で、薄く錆が見られ、表面に欠損も見られる。鏡面は、破片が台紙の上で接合されているため観察できなかった。

分量と形態 直径7.95cm・重量33.5gである。鈕を含めない内区の厚さは、0.13~0.15cmと薄く、縁部高が0.30cmである。形態は、反りをもたず扁平である。

文様構成 半球形を呈する鈕には、鈕孔を境にして向かい合う2つの弧線によって鈕座が表現されている。内区は、6つの小乳が、崩れたΩ形と脚で構成される乳脚文によって囲まれ、内区周縁に擬銘帯が巡る。外区は、内側から複波文・櫛歯文帯・鏡縁部からなる。

鈕・鈕座 楕円状の半球形を呈し、直径が1.55×1.46cm、高さが鏡背から0.63cmある。鈕底面は、鏡背と同じ高さである。鈕孔は、内部は方形であるが、その入り口は、異なった形状をもつ。図上下側にあたる鈕孔Aの入り口が凸形[第3図]、上側の鈕孔Bは台形状[第4図]を呈する。

内区文様 直径2.9mmほどの小乳が細線表現され、形の崩れたΩ形と「脚」に囲まれている。小乳は低い山形を成し、頂部は磨耗を受けて丸みを帯びている。6つの小乳の頂部をつなぐと、不整六角形を呈し、乳がやや不均等に配置されている。Ω形と「脚」の乳脚文は、当鏡の主文様にあたる。共に小乳と接しておらず、形も不規則のため、フリーハンドによって表現されたと考える。Ω形は、小乳を完全に囲まず3本の線に分離し、弧線と「ハ」字形や「L」字形状で表現され、脚を1本もつ。

内区外周文様 擬銘帯によって構成される。多様な形態の擬銘は、両端を線によって隔てられている。

外区文様 縁部に向けて複波文帯-櫛歯文帯の構成をもち、圏線によって区画されている。複波文帯は、波文の頂角の角度や形状、線の幅が場所によって異なり、波文がつながっていない箇所も散見されるなど、フリーハンドによる表現の可能性が高い。櫛歯文帯は、線の幅や角度、間隔が随所で異なるが、比較的均等に表現されている。

鏡縁部 素文で、微斜縁を呈する。

型式学的特徴 当鏡は、外区文様が複波文と櫛歯文によって構成された乳脚文鏡系の鏡であり、森下分類(森下 1991)の乳脚文鏡系C2式に該当するであろう。外区文様から判断すると、6世紀中葉~7



第3図 鈕孔A



第4図 鈕孔B

世紀前葉を中心とした年代を与えられる(森下 1991)。

(2) 小型海獣葡萄鏡 [第6図-2、図版1・2-2]

遺存状況 鏡縁部の大部分が欠損しており、鑄上がりが悪く、鏡背は鑄放しの状態である。鏡面には薄く錆が見られる。

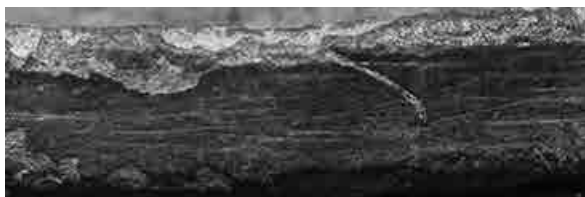
各部の形状 面形は、鏡縁部が全体的に欠損⁴⁾しているもののほぼ正円形を成し、残存径 3.54 cm・重量 9.2 g である。鏡面は、やや不明瞭だが光沢をもち、鑄放しの状態ではなく、研磨を施されたことがわかる。鏡縁部にかけて僅かに反るが、基本的に平坦な形状を呈し、鏡背は匙面を形成する。鏡縁部は三角縁状を呈する。鏡背は鑄放しの状態で、表面は粗い。文様は、表出の具合が悪く⁵⁾弁別は難しい状況であるが、鏡縁部付近に葡萄文が巡り、鈕の周縁に3体の獣文が観察できる。小型海獣葡萄鏡では本来、4体の獣文が表現されるはずである。本鏡でも、その位置に獣文と、形態が類似する窪みを確認できた。鈕は鼻鈕状を呈し、鈕孔は 1.5×1.3 mm を測り、中子によって形成される。

型式学的特徴 唐式鏡の研究を行った杉山洋氏の分類(杉山 2003)によると、小型海獣葡萄鏡B類にあたる。B類鏡は、外区除去⁶⁾が施された内区のみ鏡であり、国内で10面ほど知られている。外区をもつA類を含めた特徴として、7世紀後半～8世紀中頃に出土事例がまとまることや、確認されている全ての鏡が同型鏡であり、藤原京・平城京で多く出土することから、その製作が畿内中央の工房において一元的に行われたと推定される(杉山 2003)。鑄型は、飛鳥池工房遺跡で確認された富本鏡と同様の連鑄式鑄型が想定されており、鑄造後に調整を施さない鑄放し状態であることから、祭祀用の鏡と意味付けられている(杉山 2003)。

(3) 葡萄文鏡 [第5図、第6図-3、図版1・2-3]

遺存状況 鏡縁部の随所に欠損箇所がみられるものの、良好な残存状況である。鑄上がりは良くないが、他の唐式鏡と比較すると良好である。

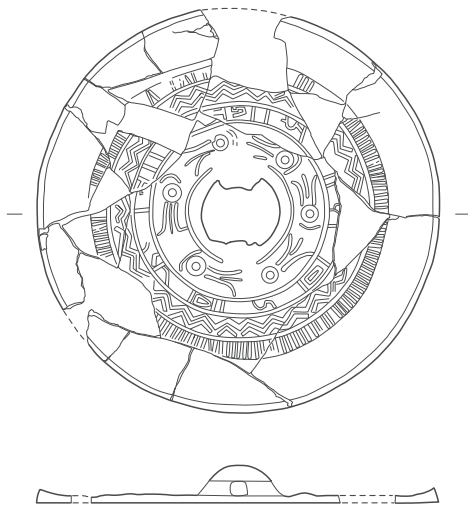
各部の形状 面形はほぼ正円を成し、直径 5.16 cm・重量 29.9 g である。鏡面は研磨が施され、光沢をもつ。鏡胎は鏡縁部にかけて僅かに反りをもち、鏡縁部は三角縁状を呈し、側面には横方向に走る鑄がけの痕跡[第5図]が観察できる。鏡背は鑄放しの状態で、粗面である。文様は曖昧模糊としているが、花卉状の鈕座と、5つの葡萄文が確認できる。葡萄文は、表出が鈍い状態であるが、最も良く表現されており、上部に稜を形成する。また、葡萄文の間には葡萄唐草文が表現されているが、鑄つぶされてお



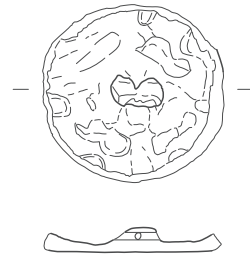
第5図 葡萄文鏡 ヤスリ掛け

り弁別できない。鈕は、図様の表出が甘い花卉状の鈕座に囲まれた鼻鈕である。鈕孔は、中子によって穿たれ、直径約 2.0×1.7 cm である。

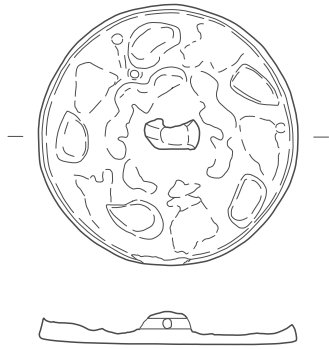
型式学的特徴 本鏡は、文様表出が不鮮明であることから、文様の鮮明な原型鏡から複数回の踏み返し鑄造を経た鏡である場合や、既に文



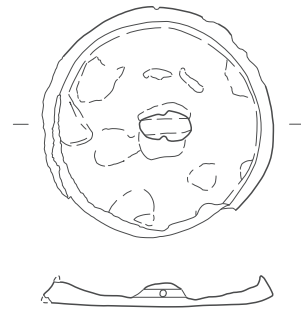
1 乳脚文鏡



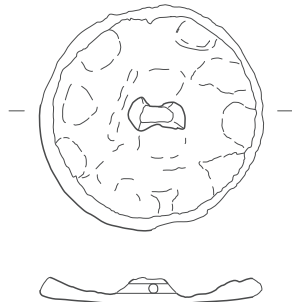
2 小型海獸葡萄鏡



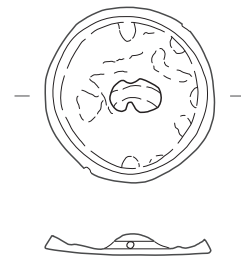
3 葡萄文鏡



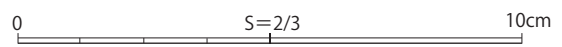
4 小型唐式鏡 1



5 小型唐式鏡 2



6 小型唐式鏡 3



第6図 青銅鏡実測図



第7図 陝西省西安市東郊韓森寨
第3号墓出土葡萄文鏡
(陝西歴史博物館 2012)

S=2/3

様が不明瞭な原型鏡を踏み返して鑄造されたものと推測できる。

葡萄文鏡は、管見の限り日本国内での出土例が無く、唐式鏡の故地である中国においても、その出土例は寡少である(徐 1994)。本鏡に最も類似する例としては、河南省偃師市杏園李珣墓出土鏡(洛陽博物館 1988)と、陝西省西安市東郊韓森寨第3号墓出土鏡[第7図](陝西歴史博物館 2012)があげられる。いずれも、外区に忍冬唐草文、内区に5つの葡萄文と葡萄唐草文、花卉状の鈕座と半円球状の鈕をもつ葡萄文鏡であり、本鏡と鈕座・内区文様が酷似する。特に、陝西省西安市東郊韓森寨第3号墓出土例を見ると、内区の直径が約5.5cmであり、本鏡に近似した値である。以上のこと

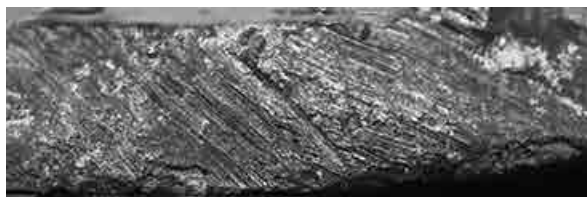
から、本鏡は、外区除去加工が行われた踏み返し鑄造による葡萄文鏡と判断できる。製作時に外区の除去が施される例は、中国国内の出土例にも存在しており(植松 2010・2014)、本鏡の生産地を特定することは難しい。

葡萄文鏡の製作は、主に盛唐期(684~741年)から中唐期(742~805年)にかけて行われたと考えられている(徐 1994)。また、河南省偃師市杏園李珣墓出土鏡は、被葬者の没年が玄宗の開元6(718)年と判明していることから、718年以前に生産されていたと判断できる。本鏡の製作年代は、文様表出の不鮮明さや外区除去加工が行われていることから、8世紀前半以降の可能性が想定できるが、比較事例が少ない現状では断定できず、類例の増加を期待したい。

(4) 小型唐式鏡 1~3 [第6図-4~6、第8図、図版1・2-4~6]

遺存状況 鏡縁部に欠損箇所をもち、鑄上がりが悪く、鏡背は鑄放しのままの粗面を呈する。特に2は、鏡背や鈕、鏡縁部など大部分が破損しており、X線写真[図版2-5]をみると、「巢」が広がっている様子がわかるため、鑄造状況の劣悪さが破損の主な要因と考えられる。また、鏡面や鏡縁部に見られる錆は、小型海獣葡萄鏡のものと色や付着具合が近似している。小型唐式鏡にも多少の錆が見られる。

各部の形状 面形は、1・2とも正円に近く、1は直径4.60cm・重量20.7g、2は直径4.45cm・重量20.2g、3はやや角張った円形を呈し、3.50×3.33cm・重量6.5gである。鏡面は、差があるも



第8図 小型唐式鏡 ヤスリ掛け

のの光沢をもち、1・3は明瞭な状態である。鏡胎は、鏡縁にかけてやや大きく反り上がりながら厚みが増加する。鏡縁部は厚く、三角縁状を呈し、鑄掛けによって整形され、3の側面に斜め方向の鑄掛けの痕跡が確認できる[第8図]。鈕は鼻鈕状を呈し、鈕孔は、1が直径1.5mm、

2は8×2.0mm、3は1.7mmである。鏡背は匙面を形成し、1・2の文様表出状況は、甘く弁別が難しい状態だが、鏡縁部周辺をはじめとして丸みをもった凸面があるなど、鏡背文様の存在が指摘できる。3でも、僅かながら文様のような隆起が観察できたが、断定的に文様表現として判断せず、あくまで可能性に留めておきたい。1・2は、鏡胎や鏡縁部、面形、厚みなど、極めて類似する。

型式学的特徴 1・2は、残念ながら鏡式の特定には至らなかったが、何らかの文様をもつことと、面形が小さいことから、本稿では小型唐式鏡と位置付けておく。面径や鏡胎は以下の類例等と近似する。

3の類例として、奈良県平城京跡SD920出土鏡(松村1984)や石川県寺家遺跡祭祀地区包含層・SBT16遺構出土鏡(小嶋編1988、牧山・中野2010)、三重県八代神社神宝鏡(大西1955)などがあげられる。鏡胎や鏡縁部の形状が類似する。平城京出土鏡は、報告者の松村恵司によって素文小鏡B類として唐式鏡の模倣と意味付けられている(松村1984)。また、奈良～平安時代の素文鏡の分類を行った小野本敦分類のB類に該当し、唐式鏡との親縁性から、その生産は唐式鏡の製作者が担ったと想定されている(小野本2013)。類例を見てみると、同様に、曖昧ながら文様状の隆起が見受けられる。中型・小型の唐式鏡は全て、踏返しによって鑄造された(杉山2003)ことを考えると、既に多数回の踏返し鑄造を経た、文様が不鮮明な鏡を基に製作した場合、結果として素文鏡状の小型鏡が成立した可能性を推定したい。

4 宮脇遺跡出土鏡の歴史的意義

以上、出土鏡の報告と型式学的位置付けをおこなった。次に、当該期における伊豆半島・伊豆諸島の状況について触れ、宮脇遺跡出土鏡の歴史的意義を考えてみたい。

唐式鏡出土遺跡 出土した5面の鏡は、全て面径が10cm以下の小型鏡である。唐式鏡で出土数が最も多い海獣葡萄鏡では、面径の違いによって機能が異なることが指摘されており、小型海獣葡萄鏡は祭祀用として用いられる傾向にあるという(杉山2003)。伊豆半島では、下田市洗田遺跡から小型唐式鏡⁷⁾1面(大場ほか1938)、南伊豆町日詰遺跡(鈴木1978)から、杉山分類A類にあたる小型海獣葡萄鏡(杉山2003)と、外区除去加工が行われた狻猊鏡(植松2014)が各1面検出されている。伊豆諸島では、式根島野伏西遺跡より、8世紀前半～中頃に比定される土師器・須恵器とともに小型海獣葡萄鏡1面が出土しており(小林・前田1981)、唐式鏡が濃厚に分布を示す地域である。小型海獣葡萄鏡は、畿内中央で一元的に生産(杉山2003)されたと考えられている。

伊豆地域を離れてみても、杉山分類B類の小型海獣葡萄鏡が出土した国家が関与した石川県寺家遺跡や愛知県後田遺跡(宮内庁書陵部1976)など国家が関与した祭祀遺跡と推測されている(杉山2003、牧山・中野2010)。特に寺家遺跡では、狻猊鏡や小型海獣葡萄鏡など、多くの唐式鏡が出土しており、鏡の様相が宮脇遺跡と類似する。

伊豆半島・伊豆諸島の祭祀遺跡 伊豆半島では、古墳時代中期～奈良・平安時代にかけて海に突出した岬、海に面した丘陵や小島など立地環境から海に関わるとされる祭祀遺跡が豊富に営まれてきた。伊豆諸島でも、東京都大島町和泉浜C遺跡において、『日本書紀』天武天皇13(684)年条に見える噴火に際して、国家安寧を願う祭祀が行われたと推測されている(内川2008)。宮脇遺跡も、畿内で生産され

たとえられる唐式鏡が出土した祭祀遺跡であり、古墳時代から律令国家段階にかけての伊豆地域における祭祀行為と、深い関係を有していたものと考えられるだろうか。

謝辞

本稿の執筆にあたり、古谷毅先生、内川隆志先生、深澤太郎先生には資料の整理・報告にあたり多大なる御助言を頂戴し、大日方一郎氏には中国語文献についてご教授賜った。また、熱海市教育委員会の栗木崇氏には資料掲載の承諾を頂いた。末筆ながら謹んで感謝申し上げます。

註

1) 唐式鏡を扱った論考(中野 1973、勝部 1998、杉山 1999・2003 など)では、舶載・国産問わず、日本で確認される唐様式の鏡の総称として用いられており、本稿でもこれに従う。

唐式鏡の製作技法には、大きく分けて、挽型技法と踏返し技法がある。挽型技法は、大型の海獣葡萄鏡などの文様表現が立体的な鏡(挽型凸型技法)や海磯鏡などの文様表現が平板で文様が複雑な鏡(挽型凹型技法)に用いられた。踏返し技法は、当時、最も多くの鏡製作に利用された技法である。中型や小型の唐式鏡は、全て踏返し技法によって作られた(杉山 2003)。

2) 本報告で用いる通し番号と、『日本考古学年報』11・『熱海市史』資料編との対応関係は、以下の通りである。

本報告	『日本考古学年報』11	『熱海市史』資料編
乳脚文鏡 1	—	青銅製変形六獣鏡 1
小型海獣葡萄鏡 2	青銅製儀鏡 上段中央	青銅製素文儀鏡 5
葡萄文鏡 3	青銅製儀鏡 下段左	青銅製素文儀鏡 2
小型唐式鏡 1 4	青銅製儀鏡 下段右	青銅製素文儀鏡 3
小型唐式鏡 2 5	青銅製儀鏡 下段左	青銅製素文儀鏡 4
小型唐式鏡 3 6	青銅製儀鏡 上段左	青銅製素文儀鏡 6

3) 杉山洋氏は、面径が 6 cm 前後の海獣葡萄鏡を小型海獣葡萄鏡と呼称し、内外区が揃うものを A 類、外区の除去が施されたものを B 類に分類した。

4) 小野真一氏によると、5 面の唐式鏡のレプリカを制作した際に、元々の破損・欠損に加えさらに多くの部分が剥離したという(小野 1999)。

5) 文様表出が不鮮明な理由として、文様の鮮明な原型鏡から相当数の踏返し鑄造を経た鏡である場合や、既に文様が不明瞭な原型鏡を踏返して鑄造されたとことが推定される(杉山 1999・2003)。今回扱った唐式鏡は全て、文様の表出具合が模糊としており、その要因として上記の製作上の都合が考えられる。

6) 唐式鏡の外区除去加工の要因として、鑄造時に鑄込みを失敗した鏡を内区だけで独立させたことが想定されている(杉山 1999・2003)。海獣葡萄鏡をはじめ、唐式鏡にはしばしば見られる加工方法である。

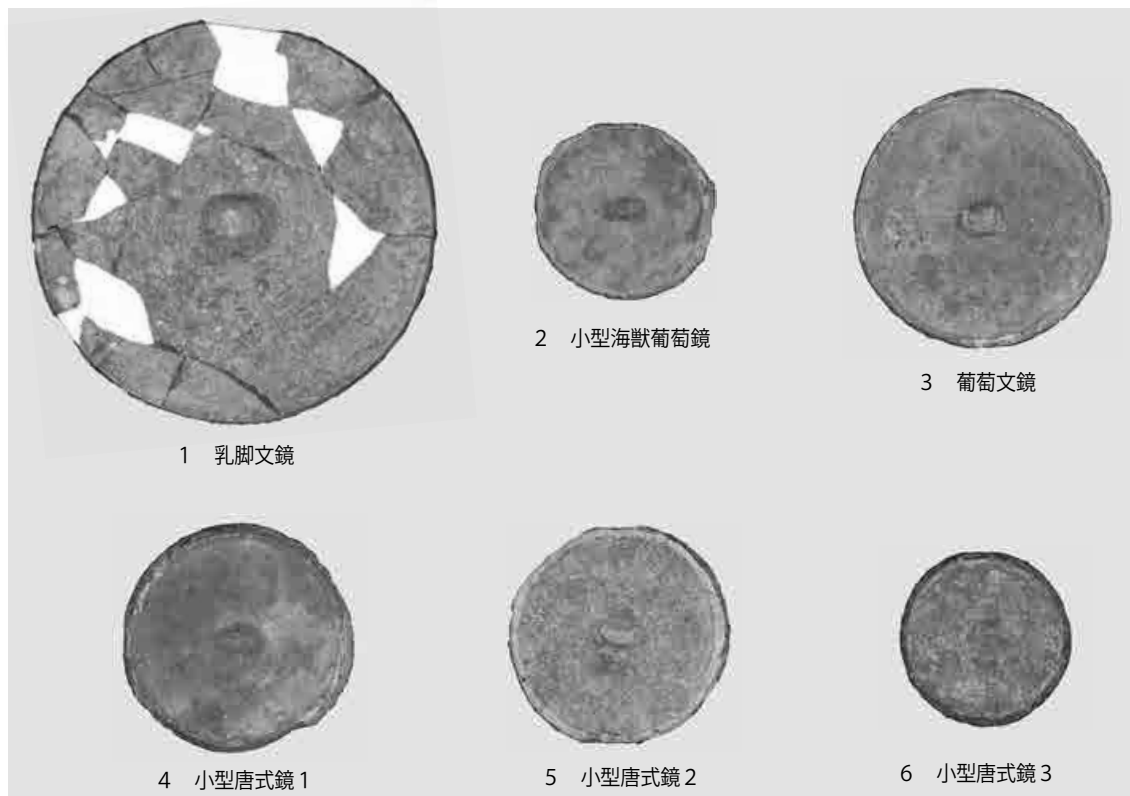
7) 國學院大學博物館が所蔵する洗田遺跡出土資料〔収蔵品番号 K 875〕を実見した結果、僅かながら文様状の隆起が看取できたため、小稿の本型唐式鏡 3 と類似する小型唐式鏡と判断した。

引用・参考文献

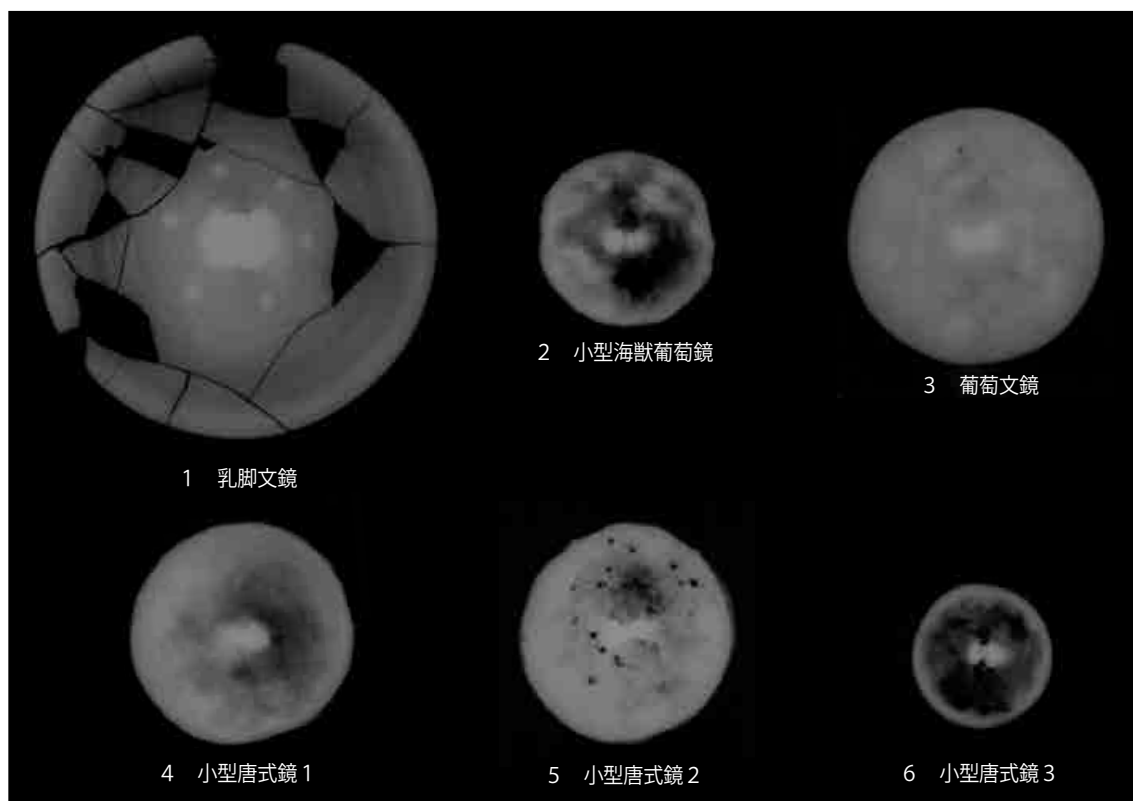
今平利幸 1990「大日塚古墳出土の小型素文鏡について」『下野茂原古墳群』久保明子177～187頁

植松勇介 2010「法隆寺西門堂薬師如来坐像に納入された鏡」『古代文化』第62巻第1号 古代学協会 99～111頁

- 植松勇介 2014「唐式鏡における同型鏡群の再検討 一外区除去の一事例一」『學苑』第881号 昭和女子大学
2～12頁
- 内川隆史 2008「伊豆諸島の祭祀遺跡」『伊豆の神仏と國學院の考古学 発表資料集』國學院大學傳統文化リ
サーチセンター 59～74頁
- 大西源一 1955「志摩国神島八代神社の古神宝」『國學院雜誌』56卷2号 國學院大學 125～130頁
- 大場磐雄・佐藤民雄・江藤千萬樹 1938「南豆洗田の祭祀遺跡」『考古学雜誌』第28卷第3号 日本考古学会
176～211頁
- 大場磐雄 1967「十二 神の道」『まつり 考古学から探る日本古代の祭』学生社 161～173頁
- 小野真一 1962「静岡県熱海市上多賀祭祀遺跡」『日本考古学年報』11（昭和33年度）日本考古学協会 120
～121頁
- 小野真一 1972「上多賀宮脇祭祀遺跡」『熱海市史』資料編 熱海市 217～230頁
- 小野真一 1999「静岡県熱海市宮脇遺跡の祭祀遺構と儀鏡」『考古学ジャーナル』446 ニューサイエンス社
10～13頁
- 小野本敦 2013「素文鏡考 一二宮神社境内出土鏡をめぐって一」『技術と交流の考古学』同成社 223～234頁
- 勝部明生 1996『海獣葡萄鏡の研究』臨川書店
- 宮内庁書陵部 編 1976『古鏡目録』宮内庁書陵部
- 小嶋芳孝 編 1988『寺家遺跡発掘調査報告書Ⅱ』石川県埋蔵文化財センター
- 小林信一・前田光雄 1988「式根島野伏西祭祀遺跡出土の遺物について」『牟邪志』第1号「牟邪志」同人
会35～43頁
- 椋山林継 1999「伊興遺跡の祭祀遺物について」『毛長川流域の考古学的調査』足立区伊興遺跡調査会 223
～234頁
- 鈴木敏弘編 1978『下賀茂南伊豆日詰遺跡 図版編』南伊豆町教育委員会
- 杉山洋 1999『日本の美術』No. 393 古代の鏡 至文堂
- 杉山洋 2003『唐式鏡の研究 飛鳥・奈良時代金属器生産の諸問題』鶴山堂
- 徐殿魁 1994「唐鏡分期的考古学探討」『考古学報』1994年第3期 中国社会科学院考古研究所 299～342頁
- 陝西歴史博物館 編 2012『千秋金鑑 陝西歴史博物館蔵銅鏡集成』陝西出版集團三秦出版社
- 外岡龍二 1978「伊豆の祭祀遺跡」『駿豆考古』第20・21合併号 駿豆考古学会 32～50頁
- 中野政樹 1973「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同範鏡の分布とその鑄造技術」『東京
国立博物館紀要』第8号 東京国立博物館
- 牧山直樹・中野知幸編 2010『寺家遺跡発掘調査報告書 総括編』羽咋市教育委員会
- 松村恵司 1984「G 金属製品・ガラス製品」『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』奈良国立文化材
研究所 45～51頁
- 森下章司 1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74卷第6号 史学研究会 1～43頁
- 洛陽博物館 編 1988『洛陽出土銅鏡』文物出版社



図版 1 宮脇遺跡出土鏡X線写真



図版 2 宮脇遺跡出土鏡X線写真